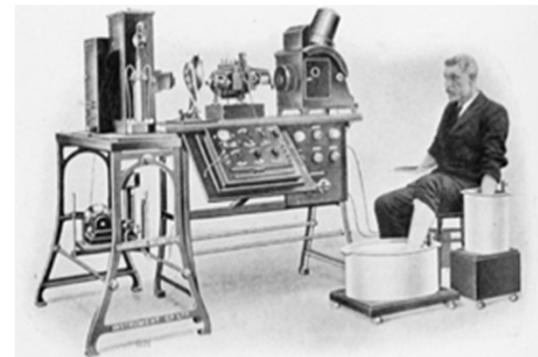


検査のお話⑬ 済生会中和病院ニュース第60号掲載

「心電図」温故知新

心電図の歴史をひもとくと、日本への渡来があまりにも早かったことに驚きます。

1903年、心電図の父と崇められるオランダの生理学者アイントーベン は、350kgの巨大な心電計（右図）を考案しました。その後またたく間に世界中に広まり、アメリカでは1914年にマサチューセッツ総合病院に納められました。日本にはアメリカより3年早く1911年（明治44年）に渡来し、当時の3帝国大学（東大、京大、九大）の生理学教室にほぼ同時に設置されたそうです。明治日本の新知識への憧れと学問的投資への熱意には感嘆の念を禁じえません。



心電図は英語でElectrocardiogramと表記します。Electro→電気，cardio→心臓，gram→図，これら3つのことばをつなぎ、『電気心動図』と訳されました。昭和10年頃には「電心図」と省略して呼ばれるようになり、昭和19年上田英雄，櫻田良精，木村栄一の著書「電心図学」が出版されて定着しました。ところが、昭和22年の日本循環器学会評議員会で用語統一が発議され、「電心図」は電信と紛らわしいという理由から「心電図」と呼ぶこととなり、現在に至っています。

心電図は「Electrocardiogram」を略して「ECG」と記載されますが、欧米の英語圏の多くの医師たちは「ECG」を「イーシージー」ではなく「イーケージー」と発音します。アイントーベンが最初に報告した論文では、ドイツ語で「Elektrokardiogramm：EKG」と記載されていることから、これに敬意を表して「EKG：イーケージー」と発音する習慣が広まったと考えられます。

最近、心電図検査を行っているとうとう「もう、終わったの?!」と患者様から言われることがあります。主治医の先生から「長めに記録してください」との依頼がなければ、電極をつけて、『ピッ』とボタンを押せば約10秒ほどで終了します。テレビ放送がデジタルになってもう5年になります。私たちが検査を担当している心電図検査も、昔はアナログでしたが、10数年前からデジタル仕様となりました。デジタルってすごいですね。